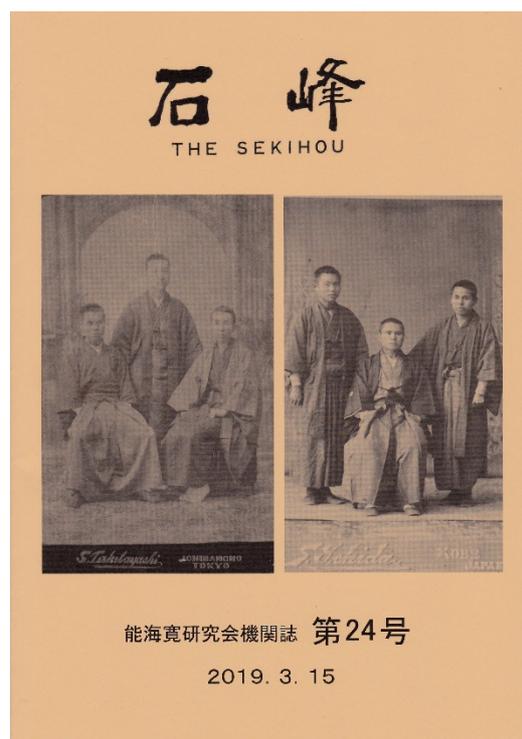


『能海寛の思想をつぐ』

タイトル	『能海寛の思想をつぐ』
著者名	植田義法
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』 ISSN 1883-4183
号	第24号
ページ	61-64
発行年	2019.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)



能海寛の思想をつぐ

能海寛研究会会員 植田 義法

はじめに

石峰第19号より開始した「山の谷間で生まれる論理」のはじめに書いていること「私は、森林に顕在する論理を追求して能海寛につながろうとする」それはチベットに向かわせた能海寛の思想をさぐり、その思想を受けつぐという宣言であった。

能海寛研究会の方々また研究会の催しに賛同され参加されたの方々のおかげで、年とともに、能海寛の思想は私の心象に明瞭となってきた、その過程でとくに大きいのは隅田正三による『純正哲学自解』の紹介であった、この純正哲学自解に、デカルト、カント、ヒュームについての思想的見解と同一平面で能海寛の「道義学」が述べられている。題名は「純正哲学自解」その冒頭で、従来の哲学に対するウイトゲンシュタイン同様の文言を明記して「純正哲学同等の道義学」と記す叙述、能海寛の思想の根幹は道義学にあり、と思う。

能海寛の『純正哲学自解』より

石峰第23号『純正哲学自解』(M26年)能海 寛(能海航雲記遺稿)：隅田正三それを引用する、ただし原文にはない句読点の位置など少し変更している。

(道義学の定義)

純正哲学は結極可もなく不可もなき、人間好事心を満足せしむる一種の学に過ぎず。今は爰に、世界に有益なる実学たらしむるには、純正哲学の位置を変じて道義学たらしむる。ここに、道義学とは直に道德倫理の学の如く考えらるるも、夫れよりも廣き意味にして、実利的、純正哲学の意なり。実利的とは、純正哲学の如くに理論一遍に偏せず、宇宙・自然の道理を能く實際的に研究して、人事日常のことに応用し人界をして完全・最良の域に達せしむるの学たらしむ、これ道義学なり。

(宇宙・自然の道理と人道)

宇宙・自然の道理は、物理上、化学上、人事上、萬事の上に見はりて日夜、実践すべきものなり。尔るに、其道中特に吾等人類の従うべき道は人倫の通なり。尔れば、道理は宇宙に互りて実に廣く行はるれども、人類にとりては人道を以て主眼とし、他の諸道理を心得るも結極、人道を全ふするにあり。これ実利的純正哲学なり。

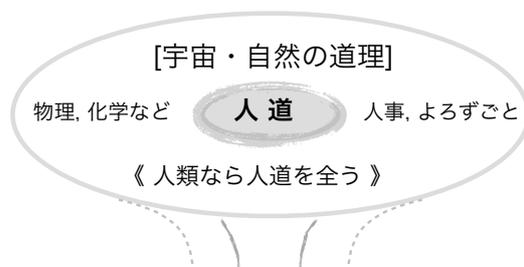


Fig 1

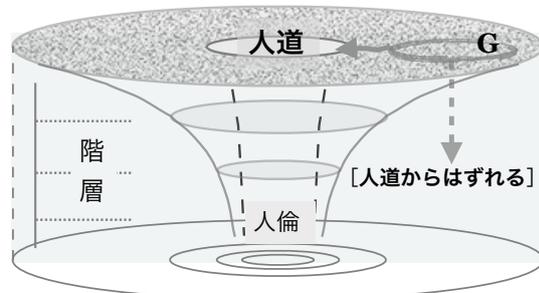


Fig 2

[この図は 植田が森林から得た共通の論理にしたがって描いた]

ケーベの定理を林冠に適用

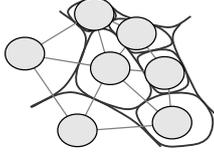
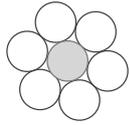


Fig 3



六方格子配置

Fig 4

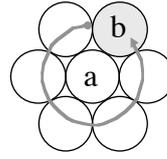


Fig 5

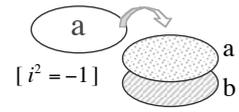
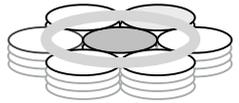


Fig 6



4回まわってπを蓄積

Fig 7

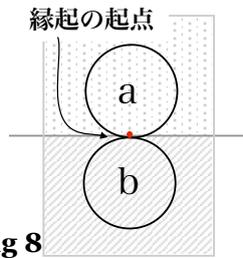


Fig 8

自然状態にあることの数式
 $e^{(\pi+s)} = 20 + \pi + s$
 それを展開した：開いた数式

体から分離する自然数
 ・体から離れるもの
 ・体に蓄積，用途で分割

縁起した体の
 起点となる「空」

Fig 9

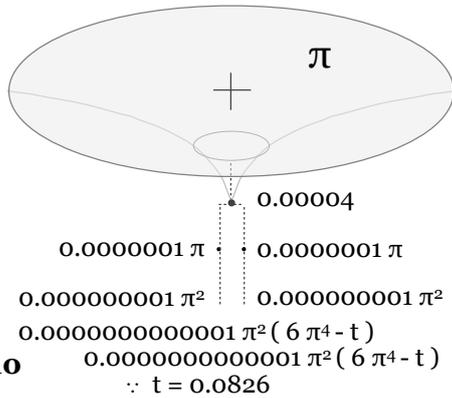


Fig 10

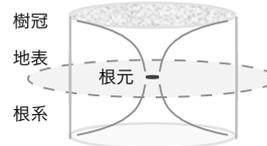


Fig 11

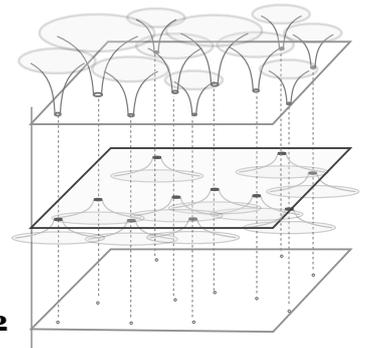


Fig 12

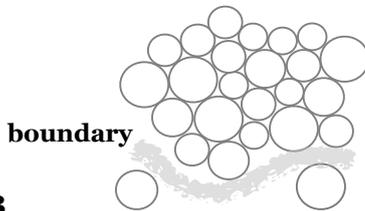
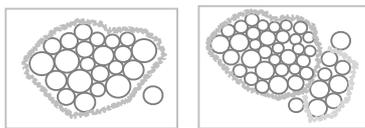


Fig 13

Fig 14



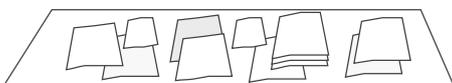
Fig 15



Fig 17



Fig 16



宇宙・自然の道理に共通してある人道

道義学は実利的純正哲学と能海寛は言う、それは明治26年当時のことである、今の世では、哲学という言葉にそれほど重みはない。能海寛が言う道義学：人道には共通ということについて明言されていないが、共通ということは道義学の中に当然として含まれている、空の思想、仏教的思考もあえて表現されぬが当然である。私は共通を追い求めた、そうして共通の論理で能海寛の道義学を支えたと思う、その実践について述べよう。

地表を広く覆う森林から得る共通の論理

森林の林冠にある個別の樹冠、その大きさを領域とよぶ。森林をつくる高木は樹冠が互いに接するようにして並び立つ、林冠にあることができる樹冠には、領域の大きさに下限がある、この下限の大きさはすべての領域に共通、大きさの下限は共通であるから、領域をもつ個別を表すものとして「下限共通」を使う。

Koebeの定理によって、平面上の領域を互いに重複せぬ円板で表現することが許されるから (Fig 3)、これにより円板の六方格子配置を得る (Fig 4)。中央の円板は周り6個の円板とそれぞれ何かの関係をもつ、これらの円板は全て下限の大きさ共通の円板である (Fig 4)、ここで指数関数の底(e):自然対数の底(e)を得る、すなわち六方格子配置の底には e がある [石峰 第19号「山の谷間で生まれる論理」から]。

石峰 第20号「山の谷間で生まれる論理 II」において、要点を Fig 5, Fig 6, Fig 7, Fig 8 に示した手続きによって Fig 9 の方程式から $\pi = (\text{円周率}) = 3.14159265359$ を得ている。この方程式からいろいろな発見があり (石峰 第21号、第22号、第23号)、さらに能海寛の「空」と合体して (石峰 第23号「能海寛の空」)、

$$\pi + s = \pi + 0.00004 + 2\pi \{ 0.0000001 + \pi (0.000000001 + (6\pi^4 - t) \times 10^{-13}) \}$$

ここに、 $t=0.0826$ 、この t はマイナス符号をもつことから
引力の物理定数が関係する数値であるように思える。

上の式および Fig 10 に示したように、「空」の数値であると考えられる s が π の底にあつて、 s にある数値 0.00004 が四元数の存在を明示する、これはさらに小さい値の π からなる層：層状の広がり階層にのる形式であることがわかった。

[この進展は興味あることだが、思考は π の底にあつて意味のある四元数まで、能海寛の道義学＝実利的純正哲学にしたがい、あとの進化は物理学者の世界だと了解する]。

下限の大きさ共通のものどうし関係がつくる e 、また e が成り立つ範囲：層について石峰 第19号で述べた。そして e をつくる群の外縁は「群にある個別の個数+1/2」にあると想定して $[1 + 1/(n - 0.5)]^n$ から e を求めた、この方が定義式 $[1 + 1/n]^n$ より格段にはやく e に収束する。この様式が、四元数の実数要素を起点に始まるものとして、

$[1 + 1/(n - 0.5)]^n - 0.00001$ から n を求めれば $n = 150.5076$ 、したがって e 範囲の内側にある個数は n から0.5を引いて150個となる (四元数にある実数の性格を述べる必要もあるが結果に影響ないのでいまは省略)。この150個という数は、人類学者のロビン・ダンバーが唱える「人間が作る共同体の構成員の上限値は約150名」(石峰 第22号)ということの数理的裏付けになる。「山の谷間で生まれる論理」で示している150体は、整然規則

にしたがう 150 体、 e 範囲の内にある 150 体ということを下限共通円板の六方格子配置から導いている。また別に、 e 範囲を定められることにより、集団の平面分布範囲の境界に適用することもできる (Fig 13)。そういうことだけではない、数値 150 はこのあとの時間記述でも重要になる。

六方格子で生まれる π は重なり $\pi \cdot \pi$ になって $\pi^2/6$ 、それは π^2 を周りの 6 個に分ける (石峰 第 2 1 号)。その $\pi^2/6$ を前述の 150 体とかけあわせて $150 (\pi^2/6) = 246.74$ を得る、石峰 第 2 2 号の整然規則の図 Fig 19 によって $150 (\pi^2/6) = 3 \times 50 \times (\pi^2/6) = 246.74$ 、ようするに自然には「 π^2 を周りの 6 個に分ける $\pi^2/6$ 」という仕組みが存在する、ということである (これに気づくことは分配の公平、経済や社会問題を考えるとき重大)。

時間という命題、 $150 (\pi^2/6) = 5 \times 5 \times 6 \times (\pi^2/6) = 25 \times \pi^2 = 25 \times \pi^2/10 = 24.674$ のとおり、われわれ一日の時間に関連するらしき数値が浮かぶ、これを一日の時間と見るか否か、私の決めることではない。

われわれの一日の 24 時間を秒単位で表して 86400 秒、またそれとは別に、四元数を表す数値 0.00004 をとる。これらを掛け合わせて $60 \times 60 \times 24 \times 0.00004 = 3.456$ という数値は、六方格子配置をつくる円板の個数 7 の半分 $7/2 = 3.5 \rightarrow 4$ とする場合の 3.5 に対応するように考える。そうすれば、Fig 8 の縁起の起点は Fig 6 の円板 a と b 間の中央にうつる、もともと、Fig 6 の状態を説明するに便利だから Fig 8 をつくったのであり、これでよい。このところは、生物が作る時間など時間の起源に関係する、そうそうには、時間生物学など、時間と生物に関する文献を読むとき役立つ [生物が作る時間が地球時間に適合したから地球上で生物は発展した、かけがえのない地球という思いが必要]。

われわれは意識してものを考える、意識して行動する、脳で意識が生まれるのに 0.5 秒かかる (脳はいかにして心を創るのか J・フリーマン、浅野孝雄訳：産業図書) ということだ。私は、脳の中で意識は Fig 8 のような仕組みで生じると理解する。

われわれが発する言葉、 $\pi^2/6$ であるものが Fig 9 に示した式 (音素相当の数値) 20 を経由して発せられるようだ、そのことを石峰 第 2 0 号の「言語表現に現れる e の層」に示している。言語、思考も六方格子配置の図式で発せられる、したがって石峰 第 1 9 号の四色問題に関連する事態の影響を受ける、ようするに広く見れば道義学から偏った教育、習慣、文化もあるということである。能海寛は純正哲学自解でつぎのように書いている。

教育とは何ぞや。廣く云へば宇宙の道理を人類に知らしめ行はしむるの方法なり。又極適接に云へば人倫、道德の知及行を人心中に開發せしむるの術なり。尔れば、人間は何をなすべきかを知り人たるの行いをなさしむる学問なり。故に、宇宙、自然を研究して人為的ならず教へらると云うよりも自脩の法に由らざるべからず。

教育にして道德を得ず。知行することを得ざれば真の教育にあらず。徒に疑智猾智のみ増すは悪の根元なり。固より道德、倫理の学のみ教育にあらざるも、主眼ここにあれば、人形造りて眼を入れざるが如し。又道德学は諸学の大根本なり。人間たらしむるが教育の目的なれば、人間たるに主宰となりて働く心を脩むることの必要生ず、これは教育の一大要点なり。